

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 広島市中区上幟町 11-32
管理機関名 学校法人 広島女学院
代表者名 理事長 中川 日出男 ㊞

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 広島女学院中学高等学校

学校長名 渡辺 信一

3 研究開発名

「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による高大連携型グローバル人材育成」

4 研究開発概要

研究開発の目的は、本校がめざすグローバルリーダー、「核の惨禍のない世界を創り出す、しなやかな女性」を育成することである。そのためには、中高の教員集団、生徒、連携先の大学がこの目標を共有することを通じて、価値観の違う他者と出会い、確かな「平和観」「対話力」「リーダーシップ」を培うことが重要である。

教員組織として、従来の部署を統合した「グローバル教育推進部」を立ち上げ、同部を中心に課題研究の具体案を作成し、教育の方法を学校全体で共有しながら、成果を定期的に報告し、課題を随時検討していく。

ヒロシマの理解と発信を基盤に置きつつも、グローバル規模での社会課題を探求し、当事者と対話を通じて平和を共創していく課題研究は、先にあげた「平和観」「対話力」「リーダーシップ」の養成を意識したプログラムとなっている。

本年度も、新たな海外・校内の研修プログラムを立ち上げるとともに、高1～3の学年で“Global Issues (GI) I・II・III”を開講し、より高い意識をもったグローバルリーダーの育成を目指している。さらに海外の中高生を本校に招き、平和構築に向けて討議する“Peace Forum”を実施し、これまでの学びを具体的な実践につなげることができるよう、工夫を凝らしている。実施にあたっては、高等教育機関や学生などと密接に連携すると共に、新たな連携先を開拓しさらなる生徒の成長を促す。

最終年度においては、グローバル教育の成果を広く地域社会に還元するために、成果普及のための取り組みを増やすとともに、指定後にSGHの成果をつなぎ課題を克服するための教育構想を明確化する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(a) 経理事務の管理												→
(a) 事務職員の雇用												→
(b) 運営指導会議											→	→
(b) グローバル教育アドバイザーの雇用												→
(c) 成果普及			→					→			→	→
(d) 英語外国人講師の雇用										→		→
(d) TOEFL 講座講師の雇用												→
(e) 広島女学院大学との連携				→		→			→	→	→	

(2) 実績の説明

(a) 経理事務の管理・事務職員の増員・グローバル教育アドバイザーの雇用

引き続き SGH 事務業務を担当する事務職員とグローバル教育アドバイザーの雇用に加え、外国人講師や TOEFL iBT 対策講座の講師を招聘し、学校体制を整備してきた。

(b) 運営指導会議

本年度は、2月23日、3月14日、3月16日に運営指導会議を行った。

(c) 成果普及

【第1回 SGH 研究発表会】

開催日時：2018年6月15日（土）11：00～16：00

【第2回 SGH 研究発表会】

開催日時：2019年2月23日（土）13：30～17：00

【広島県高等学校教育研究・実践合同発表会】

開催日時：2019年1月25日（水）

【第3回 SGH 等8校合同 カンボジア研修成果発表会】

開催日時：2019年1月6日（土）～7日（日）

【教育講演会】

北岡美佐子さん教育講演会 「国際社会における女性キャリアの可能性」

開催日時：2018年11月9日（金）、10日（土）

松本茂先生教育講演会 「これからの英語力とグローバルマインド」

開催日時：2019年1月18日（金）

高原孝生先生教育講演会 「平和学からみた核軍縮」

開催日時：2019年3月16日（土）

(d) 英語教育の刷新

- 英語検定準 2 級以上の取得者に対して入学試験において優遇措置をとり、中学校 1～高校 1 年生に英語特別クラスを設置。
- グローバルリーダー育成プログラムと同時並行で TOEFLiBT・英検対策講座（2018年度は中学生 1 名、高校生 43 名が受講）を開設。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程 (平成29年4月1日～平成30年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
グローバル規模で成果を挙げた生徒	→	→		→	→	→	→					
グローバルリーダー育成プログラムの強化												→
中1課題研究			→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
中2課題研究		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
中3課題研究				→	→	→	→	→	→	→	→	→
高1課題研究			→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
高2課題研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
高3課題研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
大学との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
他校との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

(2) 実績の説明

本校のSGH事業は、全校生徒を対象に課題研究“Peace Studies”として総合的な学習の時間（1単位）で実施する。

(a) グローバル規模で成果を挙げた生徒

実施月	研修内容	対象学年	派遣／受賞人数
4月	Critical Issues Forum (アメリカ)	高1-2	2
5月	NPT再検討会議(外務省委嘱ユース非核特使・ジュネーブ)	高3	2
7月	World Scholar's Cup 世界大会進出(バルセロナ)	高1	3
9月	World Scholar's Cup 決勝大会進出(イエール大学)	高1	2
9月	国際平和映像祭 学生部門賞受賞	高2	1
11月	国連本部、国連国際学校などでワークショップ実施	高2	1
12月	パリ・ユネスコ本部で講演	高2	1

(b) グローバルリーダー育成プログラム

実施月	研修内容	対象学年	参加人数
通年	Global Issues 選抜生徒対象授業／米国人大学教授による講義	高1	20
通年	Global Issues 選抜生徒対象授業／米国人大学教授による講義	高2	20
通年	Global Issues 選抜生徒対象授業	高3	24
通年	ディベートフォーラム GROW	Global Issues 受講の高2	20
3月	山梨学院大学 iCLA リベラルアーツキャンプ	Global Issues 受講の高1	19
3月	Global Leadership Program in Hawaii	Global Issues 受講の高2	17

(c) 各学年の総合的な学習の時間

実施月	研修内容	対象学年	受講人数
通年	広島と広島女学院の被爆の実相を学ぶ	中1	205
通年	世界の多様な原爆観について学ぶ	中2	204
通年	長崎の被爆の実相、核兵器廃絶の是非について学ぶ	中3	203
通年	カンボジア学習、平和共創プロジェクト	高1	238
通年	沖縄について学ぶ	高2	186
通年	模擬国連形式交渉ゲームを通して核兵器の是非について考える	高3	215

(d) 生徒の海外研修

実施月	研修内容 ()内は研究テーマ	対象学年	派遣人数
7月～8月	オーストラリア研修 (異文化理解)	中3	17
7月～8月	トビタテ留学 JAPAN	高1	2
1月	ミャンマー研修 (地方の学校訪問, 国際協力のありかた)	中3, 高1	12
3月	韓国研修 (平和構築のありかた)	中2, 高1	16
3月	カンボジア研修 (戦争の継承, 日本の支援等)	高1	10
3月	アメリカ研修 (大学の授業参加, ボランティア活動等)	中3, 高1	10
3月	アメリカ研修 (現地高校の授業参加, ボランティア活動等)	高2	17

(e) 海外からの受け入れ

実施月	研修内容	対象学年	受け入れ人数
8月	Peace Forum (核兵器禁止条約について)	高校生	4
8月	中東の教員との交流会 (碑めぐり案内, ディスカッション)	高校生	21
8月	NPO法人広島国際交流センター(韓国より)	高校生	10
8月	上智大学留学生	高校生	10
2月	ミャンマーインターナショナルスクール	高校生	12
2月	短期留学	高校生	1
2月	早稲田大学留学生	高校生	10
4～2月	長期留学	高校生	3

(f) 生徒の国内研修

実施月	研修内容	対象学年	派遣人数
8月	沖縄リーダー研修	高2	12
1月	東京大学 アーカイブ研修	高1, 高2	10
1月	第3回SGH等8校合同 カンボジア研修研究会, 成果発表会	高1～高2	7

(g) 生徒による主体的な活動

実施月	研修内容	対象学年	参加人数
通年	核廃絶署名活動, 出張プレゼンなど関連する活動	全学年	292
通年	ヒロシマ・アーカイブ証言収録 (計4名の証言を収録)	全学年	-
通年	平和公園 原爆慰霊碑等案内 (通算11回, 合計534人対象)	高校生	272
ほぼ通年	全日本高校模擬国連大会など年間4回の模擬国連出場	高1, 高2	14

(h) 大学・他校との連携

指標 (アウトプット)	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
c. 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	4校	9校	23校	30校	26校	33校	30校

7 目標の進捗状況, 成果, 評価

このSGH構想において, 「核の惨禍のない世界を創り出す, しなやかな女性」という目標の下, **生徒と教員が共同でグローバル人材を育成**していくことを目指し, “Peace Studies”の開発や国内外の研修, 教科教育との連携に努めてきた。

以下, その成果について, 本校が構想調書の中で設定した3つの力, (a)平和観 (b)対話力 (c)リーダーシップがどの程度身につけてきたかを以下に示す。

(1) 生徒の変容 — グローバルリーダーとしての力がどれくらい身についたのか

(a) 平和観の成長

指標（アウトカム）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
自主的に留学または海外研修に行く生徒数(人)	30	71	99	135	123	104	90
将来留学したり国際的に活躍したりしたいと思う生徒の割合(%)	30.0	55.5	61.1	64.6	65.8	65.1	80

「自主的に留学または海外研修に行く生徒数」は、**最終年度目標を上回る成果**を挙げた。これは、SGH 指定に伴う海外研修の定員 80 名を大きく超えている。生徒たちが自分で留学プログラム・海外研修を見つけ出し、挑戦し、選抜されているということである。この背景には、「将来留学したり国際的に活躍したりしたいと思う生徒の割合(%)」の増加がある。最終目標には届かなかったが、**指定前の倍以上に増加**したことから、**生徒の関心が確実にグローバル社会に向いている**ことを示している。

(b) 対話力の育成

指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
卒業時 CEFR B1～B2 レベルの生徒の割合	32 %	54.3 %	60.0 %	58.0 %	59.2%	75%	85.0 %
TOEFLiBT 継続受講者の平均点推移	42 点 11 名	62.5 点 11 名	70.5 点 11 名	55.0 点 9 名	67 点 11 名	72.2 点 5 名	85 点
TOEFLiBT の対策授業受講者の平均点	—	—	49.7 点 33 人	51.8 点 26 人	67 点 11 名	72.2 点 5 名	—

「価値観の異なる他者とのコミュニケーション力」の指標として英語力の成長は以下の表のとおりである。最終目標には届かなかったものの、卒業時に CEFR B1 ～ B2 レベルの資格を獲得した生徒の割合は、**全体の 75%**であり、SGH 指定前より**約 2.3 倍の大幅な増加**がみられる。さらに、そのうち B2 レベル(英検準 1 級)に到達した生徒は、10%に上る。TOEFL の結果判明分も、昨年より 5.2 点向上している。ただし、広島市では TOEFLiBT の試験会場が希望者不足のため実施されないことが多く、4～5 月にかけて受験する生徒が数名存在する。その生徒は TOEFL 対策授業の最難関クラスに所属している。彼らの点数を加味すると、より成果が上がると思われる。

(c) リーダーシップの育成

指標（アウトカム）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数(人) ()内は延べ人数	70 (400)	440 (1716)	525 (2664)	606 (3124)	501 (3799)	571 (3260)	400
公的機関から表彰、公益性の高い国内外の大会の入賞者数(人)	5	10	11	13	19	24	20
指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数(人)	5	482	703	712	728	1117	500

リーダーシップの育成指標として設定していた 3 つの指標は、いずれも最終目標を大きく上回った。課題研究が机上の学びだけに終わらず、行動・実践に結びついていることが示されている。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

SGH 校に課された「グローバルリーダーを育成するカリキュラムの開発」について、本校は**想定以上の成功を収めた**と言える。それは、先述したいくつもの定量的な指標からも明らかである。生徒の成長を実現した理由は、4つある。(a)カリキュラム・マネジメントが機能したこと、(b)主体的・対話的な深い学びが起こったこと、(c)ローカル・グローバルな課題研究テーマを設定したこと、(d)社会に開かれた学校になったこと、である。

(a) カリキュラム・マネジメントの確立

本校では、平和教育委員会・国際教育委員会など特色教育を担う組織が指定前から存在していた。しかし、それぞれの委員会が個別に教育活動を行っており、課題研究のカリキュラム全体を統括する部署やビジョンが存在しなかった。

SGH 指定を受けて、各委員会を統合した「グローバル教育推進部(GEC)」を新設し、校長直轄とした。GEC は課題研究「核軍縮・平和構築」のカリキュラムのグランドデザインを描き、統一的な意図の上に各学年の課題研究を推進するようになった。毎週の各学年会で課題研究について取り上げ、隔週～毎月の GEC 部会で共有した。その結果、**学校全体で課題研究の目的・内容・手法を共有**できるようになった。教員アンケートからも、SGH 開始当初に比べて教員の協力体制が進んでいったことがわかる。

この委員会が毎年の課題研究の進捗・成果・課題を教員全体からアセスメントし、実施体制の改善を実行してきた。結果、**6 年カリキュラムの整合性・体系性を高めることに成功**した。

① 今年度のSGH諸活動（Peace Studies・国内外研修・課外活動・グローバルリーダー育成クラス（GI）など全てを含む）に関して、どのように思っていますか。

アンケート回答項目：（1.強く思う 2.そう思う 3.あまり思わない 4.全く思わない）のうち、1・2を回答した教員の割合。これ以降の教員アンケートも同様。

教員アンケート	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
今年度のSGH諸活動の計画立案や運営に関して、教員間での連携や協力関係が築かれていた。(%)	-	-	57.8	89.8	93.6	80.0	-

(b) 主体的・対話的な深い学び

SGH 指定前と後とでは、授業のあり方が大きく変わった。講義形式がほとんどだった授業に、アクティブ・ラーニング型の手法を取り入れた**生徒の主体的・対話的な深い学び合いを促す授業**が一気に広がった。この背景には、SGH の取り組みが一部の教員にとどまらず、学校全体で共有されたことと、管理機関・管理職が適切に実施した研修会がある。ここでは前者について説明し、後者は（4）教師の変化で後述する。

本校では、課題研究を総合的な学習の時間の中で実施した。担当者はクラス担任である。担任は、教科・年齢を問わず構成されており、年度ごとに学年を移動することも多い。これが、**短期間でほぼ全員の教員が各学年の課題研究を経験し教育観・授業観を変えることにつながった**。指定2年目(平成27年)にとったアンケートでは、アクティブ・ラーニング型授業の実施は89.8%に上った。教員アンケート結果を分析すると、その背景として、

SGH 諸活動が自身の指導方法・内容に影響を与えたことが挙げられる。

教員アンケート	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
この5年間で、本校における授業の指導方法や内容に何らかの変化(影響)が見られた。(%)	-	-	-	95.8	100	97.1	-

現在は、課題研究の時間にとどまらず、どの学年のどの授業でも、生徒自身が考えて答えを出し、お互いが学び合う場面が見られる。**新学習指導要領において実施される探求授業に向け、しっかりと準備が整っている**状況である。

(c) ローカルとグローバルを行き来する課題研究カリキュラム

本校の課題研究テーマは「核軍縮・平和構築」である。これは、地元広島の問題に答えると同時に世界の課題に答えることになる、**ローカルと・グローバルが結びついたテーマ**である。生徒の問題意識を世界に徐々に世界に向けさせていくために、段階的なカリキュラムを構築したが、テーマに適切にアプローチする上でも非常に有効であった。

中1で地元広島の原爆被害を調査したうえで、中2では国際社会の多様な視点から広島を見ることで中1の学びを相対化し、原爆使用を正当化する立場の人々の考え方にも触れる。そのうえで中3では対立を相克し、合意を形成するにはどうすればよいか考察する。広島に関する探究を基盤に、高1・2では国内外の社会課題をケーススタディの対象とし、高3で卒業論文を執筆する。

このように、**学年が上がるにつれて以前の学びを更新していく整合的・体系的な課題研究カリキュラム**が、生徒の興味・関心を段階的に引き上げ、**進路選択にも大きな影響**を与えている。「国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合」は昨年よりやや減少したが、**SGU への進学者数は増加**した。

教員アンケート	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
5年間の SGH 諸活動を通じて、生徒のグローバルな課題に対する興味関心に変化が見られた(%)	-	-	-	97.9	100	94.3	-
指標 (アウトカム)	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
SGH での課題研究が大学の専攻分野に影響を与えた生徒の割合(%)	-	-	-	-	65.2	69.0	65
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合(%) ※()は SGU への進学者数	32	-	-	-	51.2 (74)	42.8 (79)	65

(d) 社会に開かれた学校

SGH 指定によって、国内外の国際機関・大学・高校など外部の専門家・大学生・高校生との連携が劇的に増加した。課題研究の助言・評価・共同研究・共同実践に、**多数の外部人材が参画**するようになった。これによって、**教員の指導力向上や生徒の成果物の質的向上が**いっそう推進された。本校における課題研究が、広く社会全体に開かれていると言える。

指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数(校)	4	9	23	30	26	29	30
課題研究に関して大学教員及び学生などの外部人材が参画した述べ回数(回)	100	100	110	1326	1841	1959	2000
課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した述べ回数(回)	2	15	40	48	60	278	35
帰国・外国人生徒の受け入れ者数(人)	121	95	144	112	170	122	190
教員アンケート	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
SGH諸活動を通じて、大学等との人的ネットワークが広がった(%)	-	-	64.5	73.7	85.1	97.2	-

(2) 高大接続の状況について

大学と教育理念・手法・内容を共有して、生徒の課題研究を実施した高大接続のモデルケースは、2件ある。東京大学(首都大学東京)と広島市立大学との共同研究について説明する。

(a) 東京大学(首都大学東京)とのヒロシマ・アーカイブ共同制作

東京大学大学院教授の渡邊英徳氏(前首都大学東京准教授)と本校の生徒が、ヒロシマ・アーカイブの共同制作を継続的に実施してきた。ヒロシマ・アーカイブは、被爆証言・写真資料をデジタルアース上にマッシュアップすることで、被爆の実相を伝えるアプリケーションである。渡邊教授・研究室は、情報デザインとデジタルアーカイブを専門している。本校の生徒が被爆者の方たちと丁寧に信頼関係を築いて証言を記録・編集し、被爆の実相を伝えるための成果物としてヒロシマ・アーカイブをアップデートしてきた。

渡邊教授・学生らも定期的に来校して生徒に助言し、生徒の活動を技術的にサポートしてくれた。年に1回は東京大学(首都大学東京)を生徒たちが訪問し、最新の機器を用いたデジタルアーカイブ技術を学ぶ研修を実施した。近年は、AIによる自動色付け技術を駆使して白黒写真をカラー化する活動も始まった。これにより、被爆前後の広島を写した白黒写真が鮮やかに蘇り、被爆者の方の記憶を呼び起こして新たな証言を得ることができるなど、大きな反響があった。

これらの活動が評価され、広島市からは毎年海外研修として世界各地の **NPT 再検討委員会に本校の生徒 2~3 名が外務省よりユース非核特使に任命**され、プレゼンテーションの機会を与えられている。さらに、AIによる写真カラー化と広島をテーマにした本校生徒の映像作品「記憶の解凍」は、国際平和映像祭(2018年)で高校生としては異例の学生部門賞に輝いた。**パリ・ユネスコ本部やニューヨーク国連本部などでも映像作品を発表する機会**を与えられ、本校における課題研究の成果を国内外の多くの人々に発信することができた。

このヒロシマ・アーカイブをより多くの人に利用してもらうために、広島平和研究とヒロシマ・アーカイブ利用法をまとめたパンフレットを作成し、連携校・訪問校に配布し成果普及を図った。

実施	研究内容
2014年6月	渡邊教授来校, ヒロシマ・アーカイブについて講演
2014年6月	学生と来校, 本校生徒とアーカイブ制作 意見交換
2014年11月	首都大学東京研修
2014年度	11名の被爆証言を収録, ヒロシマ・アーカイブにアップデート
2015年6月	渡邊教授来校, ヒロシマ・アーカイブについて講演
2015年6月	首都大学生と来校, 本校生徒とアーカイブ制作 意見交換
2015年6月	首都大学生とアーカイブ制作
2015年7月	渡邊教授来校 アーカイブ制作(TV朝日取材)
2015年10月	首都大学東京大学生来校 アーカイブ制作
2015年11月	首都大学東京研修
2015年度	7名の被ばく証言を収録, ヒロシマ・アーカイブにアップデート
2016年6月	渡邊教授来校, ヒロシマ・アーカイブについて講演
2016年5月	NPT再検討委員会準備会議に生徒派遣
2016年11月	首都大学東京研修
2016年度	9名の被爆証言を収録, ヒロシマ・アーカイブにアップデート
2017年5月	NPT再検討会議準備委員会に生徒派遣
2017年6月	渡邊教授来校, ヒロシマ・アーカイブについて講演
2017年6月	渡邊教授来校, アーカイブについてワークショップ
2017年11月	首都大学東京研修
2017年11月	SGH全国フォーラムでヒロシマ・アーカイブについて発表
2018年2月	渡邊教授来校, 白黒写真カラー化ワークショップ
2018年3月	渡邊教授来校, アーカイブについてワークショップ
2017年度	12名分の被爆証言を収録, ヒロシマ・アーカイブにアップデート
2018年5月	NPT再検討会議準備委員会に生徒派遣
2018年5月	渡邊教授来校, アーカイブについてワークショップ
2018年6月	渡邊教授来校, ヒロシマ・アーカイブについて講演
2018年6月	渡邊教授来校, アーカイブについてワークショップ
2018年9月	渡邊教授来校, アーカイブについてワークショップ
2018年9月	国際平和映像祭で生徒の成果物が学生部門賞受賞
2018年11月	渡邊教授とともに, 国連本部でヒロシマ・アーカイブについて生徒が発表
2018年12月	SGH全国フォーラムでヒロシマ・アーカイブについて発表
2018年12月	渡邊教授とともに, ユネスコ本部でヒロシマ・アーカイブについて生徒が発表
2019年1月	東京大学研修
2019年2月	渡邊教授とともに, 内閣府デジタルアーカイブ産学官フォーラムにパネリストとして登壇
2019年3月	渡邊教授とともに, SDGs Award 2018で生徒がヒロシマ・アーカイブについて発表・講演
2019年3月	渡邊教授とともに, デジタルアーカイブ学会で生徒が発表
2019年3月	渡邊教授来校, アーカイブについてワークショップ
2018年度収録	4名の被爆証言を収録, ヒロシマ・アーカイブにアップデート

(b) 広島市立大学との核軍縮共同研究 GIの成果 5年の数値比較と実績

2015～2018年の4年間、広島市立大学・広島平和研究所のロバート・ジェイコブズ教授を招き、高1・2の選抜授業Global Issues(以下GI)で核軍縮について、毎週英語による授業をしていただいた。GIは、核軍縮・平和構築研究をより高い次元ですすめるため、高校の各学年から20～30名を選抜して開講した授業で、すべて英語で授業を展開し課題研究も英語で行う(各学年1単位)。ジェイコブズ教授には、高1・2の1単位を担当していただき、**核軍拡・核軍縮の歴史や背景として国際情勢について解説**していただくとともに、生徒がこれに関連して作成する論文の指導・評価をしていただいた。

GI 1 期生(2015 年)

質問	問 1		問 2		問 3		問 4		問 5		問 7	
2015 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI
①②の合計 (%)	81.1	93.1	83.9	100	62.6	72.4	55.3	82.8	67.7	100	—	—
2016 年度	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI
①②の合計 (%)	82.8	85.7	87.3	92.9	55.5	78.5	53.1	85.7	51.4	100	—	—
2017 年度	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI
①②の合計 (%)	89.6	100	90.2	100	62.3	86.7	54.2	86.6	37.0	93.3	65.0	73.3

GI 2 期生(2016 年)

質問	問 1		問 2		問 3		問 4		問 5		問 7	
2016 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI
①②の合計 (%)	86.1	100	90.5	100	61.7	100	53.1	100	55.0	100	—	—
2017 年度	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI
①②の合計 (%)	88.6	95.5	84.9	100	61.6	90.9	58.1	90.9	50.5	100	59.3	72.8
2018 年度	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI
①②の合計 (%)	89.4	95.1	90.0	95.3	62.9	85.7	50.0	85.7	62.9	81.0	45.3	76.2

GI 3 期生(2017 年)

質問	問 1		問 2		問 3		問 4		問 5		問 7	
2017 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI
①②の合計 (%)	85.3	100	86.9	100	64.3	89.5	57.4	89.5	54.1	100	58.5	89.4
2018 年度	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI
①②の合計 (%)	88.5	100.0	87.9	100	58.4	94.5	53.9	74.4	65.4	83.4	48.7	100

GI 4 期生(2018 年)

質問	問 1		問 2		問 3		問 4		問 5		問 7	
2018 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI
①②の合計 (%)	88.5	100	88.5	100	67.5	95.5	61.9	90.0	54.8	100	81.8	100

- 問 1 以前よりも国際問題や多文化共生について興味を持つようになった。
 問 2 以前より英語力を高めたい、高める必要があると思うようになった。
 問 3 将来留学したり、仕事で国際的な場で活躍したりしたいと思うようになった。
 問 4 将来何らかのかたちで、グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった
 問 5 今年度、自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に参加した。
 問 7 私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない

入選・受賞など

実施	実施団体	大会名称	入賞・受賞内容	受賞者数
2015 年 10 月	日本国際連合協会	国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール ※副賞として国連本部に招待された	日本国際連合協会会長賞	1
2016 年 10 月	日本国際連合協会	国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール	日本放送協会会長賞	1
2016 年 3 月	広島県	若者ビジネスプランコンテスト	優秀賞	2
2018 年 7 月	World Scholar's Cup	World Scholar's Cup Japan Round	Global Round 進出	3
2018 年 月	World Scholar's Cup	World Scholar's Cup Global Round	Yale univ.決勝進出	2
2018 年 10 月	資生堂 UN Women	ジェンダー平等啓発ワークショップ	ベスト 8 選出	4
2018 年	光文社	光文社古典新訳文庫中高生キャッチコピーコンクール	優秀賞	1

2018年	自治医科大学	高校生小論文コンテスト	入賞	1
-------	--------	-------------	----	---

本校生徒の課題研究を共同制作した事例とは異なるが、地元 SGU 広島大学と教員養成において協力し合っている取り組みもある。

(c) 広島大学のグローバル教員養成プログラム支援

SGU 指定に伴い、広島大学教育学部では「グローバル教員養成プログラム」が設定されている。このプログラムは、子どもたちのグローバルマインド、コンピテンシーを開発するための教員養成授業であり、本校のグローバル教育とビジョンを共有している。そこで、同プログラムご担当の松見法男教授と本校グローバル教育推進部が共同し、このプログラムを支援してきた。具体的には、同プログラムを受講している大学生が本校の課題研究授業を視察し本校教員とレビューの時間をもつこと、本校の教員を広島大学に派遣し授業を行うことである。また、2018年2月のSGH研究発表会では、松見教授より本校の授業を講評していただいた。連携が始まって2年間で延べ9名の学生を受け入れ、4名の教員を派遣した。

(3) 生徒の変化について

SGH 構想を練るにあたって、本校ではグローバルリーダーを「核の惨禍を繰り返さない世界をつくる女性」「平和構築に貢献する女性」と位置づけた。そのようなグローバルリーダーに育成すべき力として、平和観・対話力・リーダーシップと同日し、3つの力の向上にと努めてきた。各種指標からは、3つの力が想定を超えて伸長したことがうかがえる。

・平和観：平和を共に創るという視点から世界を見る力

指標（アウトカム）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数(人)	30	71	99	135	123	104	90
将来留学したり仕事で国際的に活躍したいと思う生徒の割合(%)	30.0	55.5	61.1	64.6	65.8	64.2	80.0
SGHでの課題研究が大学の専攻分野に影響を与えた生徒の割合(%)	-	-	-	-	65.2	69.0	65
大学在学中に留学または海外研修に行く卒業生の数(人)	-	-	-	-	66 (16.9%)	88 (18.7%)	100
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合(%) ※()はSGUへの進学者数	32	-	-	-	51.2 (74)	42.8 (79)	65
指標（生徒アンケート）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
以前よりも国際問題に興味をもつようになった生徒の割合(%)	-	76.0	80.8	84.2	88.6	89.2	-
教員アンケート	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
5年間のSGH諸活動を通じて、生徒の進路選択に変化が見られた。(%)	-	-	-	78.4	85.1	88.6	-
この5年間のSGH諸活動を通じて、生徒のグローバルな課題に対する興味関心に変化が見られた。(%)	-	-	-	100	97.9	94.3	-

これらの数値の変化から、平和観が生まれ、**平和構築という視点から国内外に向かって生徒の興味・関心が開かれている**ことがわかる。

「将来留学したり仕事で国際的に活躍したいと思う生徒の割合」は指定前より倍増したが、その割合は指定3年目以降65%前後で変化が見られない。しかし、この数値は「自主的に留学又は海外研修に行く生徒」の飛躍的な上昇につながっている。先述したように、海外研修の定員80名を大きく超え、生徒たちが自ら外部の長短期留学プログラムを勝ち取っているからである。例えば、「トビタテ！留学」は毎年選抜されており、延べ9名の生徒が海外に派遣されている。このような意識を持った生徒たちは、進路選択において「国際化に重点を置く大学」を選んでいく。その割合は、指定前に比べて10%以上上昇している(うち2018年度SGUに進学する生徒数は75名)。

大学進学後も留学する学生の人数は非常に多い。日本の大学生の留学率が1%あまり(OECD 2012)なのを考えると、本校の数値は際立って高い。「**SGHでの課題研究が大学の専攻分野に影響を与えた生徒の割合**」も**最終目標を超える数値**がすでに出ている。高校時代に育んだ平和観が、高校在学中はもちろん大学に進学した後も成長し続けていると思われる。

・対話力：価値観の異なる他者とコミュニケーションを取る力

指標 (アウトカム)	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
卒業時 CEFR B1～B2 レベルの生徒の割合 (%) ※ () 内は B2 レベル	32.0	54.0 (1.8)	60.0 (4.1)	58.0 (5.0)	59.2 (5.8)	75.0 (10.0)	85.0
TOEFLiBT 継続受講者の平均点推移	42 点 11 名	62.5 点 11 名	70.5 点 11 名	55.0 点 9 名	67 点 11 名	72.2 5 名	85 点
TOEFLiBT の対策授業 受講者の平均点	—	—	49.7 点 33 人	51.8 点 26 人	67 点 11 名	72.2 5 名	—
指標 (本校アンケート)	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
以前より英語力を高めたいと思うようになった (%)	-	80.2	84.4	91.2	91.6	90.7	-
周りから認められている ・中学 (%) ※QU による。全国平均 48.8	-	59.9	65.5	70.3	72.0	74.1	-
周りから認められている ・高校 (%) ※QU による。全国平均 27.5	-	52.3	58.7	65.6	70.7	72.6	-
教員アンケート	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
5年間の SGH 諸活動を通じて、生徒の英語への学習意欲に変化が見られた。 (%)	-	-	-	91.9	85.3	91.5	-

これらの数値の変化から、**コミュニケーション力の向上と開かれたマインドが育成されている**ことがわかる。本校では、グローバル時代の対話力として英語力の向上を掲げた。最終目標には届かなかったものの、「卒業時 CEFR B1～B2 レベルの生徒の割合」は指定前の約2.3倍へと激増した。さらに、英検準1級(B2レベル)もして期間中5倍以上の10%にのぼった。これは2018年度卒業生に限ったことではない。高2でも、すでにB1レベルに達している生徒の割合が73.6%と過去最高となっており、卒業時にはさらなる成果の向上が見込まれる。TOEFLiBTも得点を伸ばしているが、広島市などの地方都市ではどうしても受験機会が限られるため、まだ受験できていない生徒が10名ほどいる。それらの結果を含めれば一層平均点が向上すると思われる。このような英語力の向上の背景には、英語教育の質的向上とグローバル教育によって「以前より英語力を高めたいと思うようになった」生徒の増大がある。教員にも、「5年間のSGH諸活動を通じて、生徒の英語への学習意欲に変化が見られ

た。」より、生徒のモチベーション向上が感じ取られている。

もうひとつ注目すべきデータは、QU アセスメントの結果である。QU は、早稲田大学・河村茂雄教授らが開発した、生徒の学校満足度・意欲・学級集団の状態を調査する心理検査である。ここから、本校生徒の「周りから認められている」と回答した生徒の割合が全国平均と比べても格段に高く、年々向上を続けていることが分かる。このような**自己肯定感・自己効力感**は、**アクティブ・ラーニング型授業や課題研究を機能させ、グローバル社会で活躍しようという原動力になる**。本校の SGH カリキュラムを通じて、生徒のスキルだけでなくマインドも成長していることが分かる。

・リーダーシップ：他者と合意を形成し、実行する力

指標（生徒アンケート）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
将来何らかのかたちで、グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった。(%)	-	45.0	52.1	54.1	57.4	54.2	-
2017年衆議院選挙で投票した高3有権者の割合(%) ※全国10代投票率40.5	-	-	-	-	70.9	-	-
私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない(%) ※全国30.2	-	-	-	-	57.8	60.3	-
クラスの中で存在感があると思う(中学生) ※QUによる。全国平均35.5%	-	36.3	41.3	45.3	45.8	50.3	-
クラスやクラブでリーダーシップをとる。(高校生) ※QUによる。全国平均15.2%	-	27.4	31.6	35.6	40.3	39.6	-
指標（アウトカム）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数(人)	70	440	525	606	501	571	400
グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数(人)	5	10	11	13	19	24	20
指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数(人)	5	482	703	712	728	1117	500

これらの数値の変化から、**生徒が自分とチームの力で課題を解決しようするマインドの育成だけでなく、具体的な実践に至っている**ことが分かる。「将来何らかのかたちで、グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった。」については50%台となっているが、これはおそらく生徒の「グローバルリーダー」の定義が海外で活躍するごく一部のエリート層となっていることに起因している。リーダーシップを発揮する方法は多様で、足元の社会に関わることからグローバル社会につながっていくことを伝えていく中で、他の質問項から生徒のリーダーシップの伸びが見えるようになった。2017年の投票率は70.9%と高く、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」(内閣府調査 2014年)も日本の平均の倍近くという60.3%であった。QUにおいても、リーダーシップの項目で全国平均より1.4~2倍という結果が出た。**自分たちがリーダーシップを発揮すれば、自分たちの力で国内外の課題解決が可能だという認識が共有**されている。このようなマインドの変化が、実際の行動となって現れている。「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数」と「グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数」「同入賞者数」は最終目標を大きく超える成果を挙げた。

(4) 教師の変化について

先述してきたように、教員が大学や国内外の公的機関など外部と積極的なネットワークを築き、授業の形も進化した。このような**教員の意識改革**の背景には、管理機関が実施してきた多様な校内研修や外部研修・他校への教師派遣がある。授業改革や学級経営、課題研究の改善など内容は多岐にわたり、原則すべての教員が参加する。以下に示す研修は、新しい教育の担い手を一部の教員にとどめるのではなく、学校全体で取り組む体制づくりを促してきた。SGHして今からも研修会を実施してきたが、指定校より頻度が増し扱う内容にも広がりが見られた。本校の教員が他校の視察やシンポジウム、研修会に参加した回数も枚挙にいとまがない。

教員アンケート	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
SGH諸活動を通じて、大学等との人的ネットワークが広がった(%)	-	-	64.5	73.7	85.1	97.2	-
この5年間で、本校における授業の指導方法や内容に何らかの変化(影響)が見られた。(%)	-	-	-	95.8	100	97.1	-

教員全体での研修会

実施	講師	内容
2014年4月	首藤太一(大阪市立大学)	良医に求められる資質とは
2015年8月	小林昭文(産業能率大学)	アクティブ・ラーニング型授業の実践について
2016年8月	山本秀樹(金城学院高校)	虐待を受けている生徒・家庭への対応について
2017年1月	濱名篤(関西国際大学)	高大接続・入試改革について
2017年8月	岡本尚也(Global Academy)	課題研究の意義とその指導法
2018年8月	佐藤信行(日本基督教団)	在日コリアン、そして今日の多文化状況と問題
2018年8月	水口洋(玉川聖学院高校)	道徳の教科化とキリスト教学校
2019年2月	木村健太(広尾学園高校)	課題研究カリキュラムとその指導法について

(5) 学校における他の要素の変化について(授業、保護者等)

(a)保護者アンケート

本校は、外部機関(株)ブレインアカデミー)に委託して、毎年、「学校満足度調査」を行っている。「グローバル教育等の特色教育が大切にされている」というアンケート項目を設け、定点観測を行っている。SGH指定前から特色教育への満足は高かったが、指定以降ほぼ100%近くまで向上した(別紙報告書参照)。

(b)成果普及

本校では、年に2回の研究発表会に加えて、地元の塾、教育委員会、本校や近隣の保護者・中高生にも積極的に成果普及につとめてきた。参加してくださった学校の中には、本校の教材を導入したところもあり、新しい教育の成果を地域社会や全国の学校に伝えてきた。5年間で本校が開催した成果普及研究会・講演会への参加者は延べ1028人、305校にのぼる。同時に、外部主催のシンポジウムなどにも積極的に参加し、グローバル教育の意義と成果を発信してきた。以下、主要なものを抜粋する。

指標(アウトプット)	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
先進校としての発表回数(回)	0	5	8	9	12	12	3
外国語HPの整備状況	△	△	○	○	○	○	○

実施	名称	内容	参加者数	参加校数
2014年5月	保護者対象説明会	本校保護者に、グローバル教育の必要性和SGHについて概要説明	73	-
2014年9月	県議会文教委員会 県内調査	県教委、県議会議員にSGHについて概要説明	9	-
2014年11月	中四国教育学会	「外への国際化の取り組み」としてSGHについて概要説明	-	-
2014年8月	研究発表会	グローバル教育の必要性和本校のカリキュラム説明、生徒の海外研修発表、運営指導委員によるパネルディスカッション	125	58
2014年11月	SSH研究会	西條農業高校主催のSSH研究会に、SGH校として生徒が登壇、研究成果を発表	-	-
2015年1月	広島県高等学校教育 研究実践合同発表会	SGHについて概要説明	-	-
2015年2月	SSH研究会	SSH研究会に、SGH校として生徒が登壇、研究成果を発表	-	-
2015年2月	研究発表会	国連紛争調停官 島田久仁彦氏による講演 生徒による成果発表、海外研修発表	83	21
2015年6月	保護者対象講演会	福原正大氏より、本校保護者に「大きな変革の中にいる子供たちの未来に向けて」と題して講演	83	-
2015年7月	塾対象説明会	地域社会の塾と塾生の保護者に対して、グローバル教育の必要性和SGHについて説明	50	-
2015年8月	研究発表会	運営指導委員の濱名篤氏より、高大接続・入試改革について講演していただき、本校教員と生徒が各課題研究・海外研修・学校組織づくりについて分科会を実施	38	27
2015年10月	私立学校専門研修会	全国私立中学高等学校私立学校専門研修会 次世代リーダー育成部会が本校で行われ、本校のSGHカリキュラムについて説明し授業を見学	43	32
2016年1月	広島県高等学校教育 研究実践合同発表会	SGHについて概要説明	-	-
2016年2月	研究発表会	荒瀬克己氏(大谷大学)より「グローバルコミュニケーションとはなんだろうか」と題して講演していただき、アクティブ・ラーニング化が進んだ本校の授業を公開	95	38
2016年4月	保護者対象 ワークショップ	本校の保護者に、生徒の課題研究授業を体験してもらう	72	-
2016年	研究発表会	追手門学院大学の井出明教授をファシリテーターとして、生徒が海外研修・課題研究について発表、その後本校教員と参加者の情報交換会を実施	49	22
2017年1月	広島県高等学校教育 研究実践合同発表会	SGHについて概要説明	-	-
2017年2月	研究発表会	荒瀬克己氏より「主体的、対話的で深い学びを支えるカリキュラム・マネジメント」と題して講演していただき、アクティブ・ラーニング化が進んだ本校の授業を公開、その後合評会を実施	58	33
2017年6月	研究発表会	フォトジャーナリストの安田奈津紀氏より「写真で伝える世界、東北の『今』子どもたちと向き合って」と題して講演していただき、安田氏を講評者として生徒が課題研究・海外研修について発表。組織づくりやカリキュラム・マネジメントについて分科会を実施	10	6
2017年7月	広島ESDコンソー シアム研修会	SGHについて、SDGsのゴールのひとつである平和の視点から概要説明	-	-
2018年1月	広島県高等学校教育 研究実践合同発表会	SGHについて概要説明	-	-
2018年2月	研究発表会	アクティブ・ラーニング化が進んだ本校の授業を公開、その後合評会を実施	82	33
2018年6月	研究発表会	ICAN 国際運営委員の川崎哲氏より「核廃絶に向けて動き出す世界」と題して講演していただき、渋谷教育学園渋谷高校・長崎県立長崎東高校・本校の生徒発表を講評していただいたのち、情報交換会を実施	14	9
2018年11月	教育講演会	北岡美佐子氏講演 「国際社会における女性キャリアの可能性」	92	2
2019年1月	教育講演会	松本茂氏講演 「これからの英語力とグローバルマインド」	8	2
2019年1月	広島県高等学校教育	SGHについて概要説明	-	-

	研究実践合同発表会			
2019年2月	研究発表会	SGH 指定5年間における本校の変化、成果、課題と指定明けの教育構想について説明し、運営指導委員の助言を得るパネルディスカッションを実施	30	21
2019年3月	教育講演会	高原孝生氏講演 「平和学からみた核軍縮」	14	1

最終年度は成果普及に特に注力した。3回の教育講演会を開き、本校の取り組みの意義を地域社会に還元した。

卒業生でニュージーランド大使館に勤務する北岡氏からは「国際社会における女性キャリアの可能性」と題して講演していただいた。本校の卒業生でもある北岡氏から、本校での学び、とりわけ平和研究を通してスタンフォード大学に進学し国内外でキャリアを積み重ねた経験についてお話しいただいた。課題研究を中心に自己推薦書を書き海外進学を勝ち取るという内容は、本校はもちろん他校の教員にも有益な情報となった。地元公立校で海外進学を希望する生徒がいるという担任の先生方には、講演後個別に相談に応じた。他校の保護者からも問い合わせがあり、今後も海外進学について情報を発信してほしいという要請を受けた。

松本茂氏からは「これからの英語力とグローバルマインド」と題し英語力・コミュニケーション力だけでなく、多様性の中で生きていくマインドについて講演していただいた。海外に行かずとも日本国内がグローバル化していく中で、多様な背景を持つ人々とどうコミュニケーションをとっていくか、示唆に富む内容であった。座談会では本校の英語教育について報告しながら、参加者と松本氏の質疑応答の時間をもった。本校の生徒とともに、本校の保護者・近隣の教員も参加しており、英語教育の刷新について広めることができた。

高原孝生氏からは「平和学からみた核軍縮」と題し、核兵器廃絶署名活動を共に行う近隣の高校生と講演を聞いた。高原氏は本校の平和構築研究の意義を改めて説明していただき、高く評価していただいたうえで、高校での課題研究を大学での学びにつなげる視点を提示された。

他校からの視察依頼にも可能な限り応じ、本校のグローバル教育、組織体制について説明し授業公開も行ってきた。その数は延べ30校に上る。中には、本校への視察後SGH・SGHA指定を受けた学校も少なくなく、訪問によって定常的な連携が生まれた事例もある。

実施	訪問校	実施	訪問校
2014年8月	玉川学園高校(SGH)	2014年8月	清教学園高校(次年度SGHA)
2014年8月	仙台白百合高校(次年度SGH)	2014年10月	公文国際高校(SGH)
2014年11月	日本福祉大学附属高校	2015年4月	関西創価高校(SGH)
2015年5月	関西創価高校(SGH)	2015年12月	桃山学院高校
2016年2月	鶴岡第二中学校	2016年5月	親和女子中学校
2016年8月	渋谷教育学園渋谷高校(SGH)	2016年11月	工学院大学附属中学校
2016年11月	鎮西高校	2016年12月	聖カタリナ高校
2016年12月	四日市高校(SGH)	2016年12月	宇和島南高校(SGH)
2017年4月	筑紫女学園高校	2017年7月	大分豊府高校
2018年2月	高知南中学校	2018年3月	関西学院高等部(SGH)
2018年4月	崇徳高校	2018年7月	桜が丘高校
2018年9月	比治山高校	2018年12月	野田学園高校
2018年12月	宮城学院高校	2019年1月	明星大学
2019年2月	東北大学大学院	2019年2月	山形県立東桜学館高校
2019年2月	活水女子大学	2019年2月	和歌山信愛高校(SGHA)

中でも特筆すべき事例としては、①関西創価高校における模擬国連活動、②宮城学院高校におけるアクティブ・ラーニング型授業、③フェリス女学院高校・啓明学院中学校での事前学習支援において、本校の実践が他校の教育活動に影響を与えた。

①関西創価高校

本校の研究発表会や個別の視察に来てくださった際、高3の課題研究の一環として行っている「核軍縮・模擬国連形式交渉ゲーム」を紹介し、体験していただいた。これを機に核軍縮模擬国連が導入し、現在は本校よりも本格的・大規模に実施されている。

②宮城学院高校

2018年2月に行った研究発表会に来校された教員に、公開授業で使用した教材「国家予算編成アクティビティ」をお送りした。社会科全体で授業資料が共有された結果、生徒の主体性を高める主権者教育を意図して作成したこの教材が好評を得、同高校でもアレンジして使用される見通しとなった。

③フェリス女学院高校・啓明学院中学校など

SGH指定以来生徒が作成してきた課題研究の成果を、冊子の形に編集して400部印刷した。フェリス女学院高校の1年生全体、啓明学院中学校3年生全体に200部ずつ配布した。両校は、高1・中3でそれぞれ広島に修学旅行で訪れ、本校の生徒が平和公園でフィールドワークを行い、研究成果の発表を行っている。この事前学習用のテキストとして、これまでの研究成果をまとめた冊子を製作、配布し成果普及を図った。両校では、この冊子が授業でも使用され、核兵器禁止条約・マンハッタン計画の歴史的背景や課題研究を实践にうつす生徒たちの思いが伝えられた。

(c)他のSGH校との連携

SGH・SGHAとの連携も活発に行われているが、その中でも恒常的で成果が上がっているものを3件説明する。

①カンボジア合同成果発表会

カンボジアで研修を行っているSGH、SGHA計8校が集まり、それぞれの海外研修成果をもちよって学びを深める合同成果発表会を実施してきた。異なるテーマでカンボジアを訪問した生徒が多様な観点で議論することで、カンボジアの抱える問題について多面的に見ることができている。

②渋谷教育学園渋谷高校(渋渋)・ヒロシマプロジェクト

渋渋では高1の課題研究としてヒロシマプロジェクトを実施し、生徒全員が広島で研修を行っており、その中から40名前後が本校を毎年訪問している。そこで両校に共通する課題研究テーマである核軍縮・平和構築についてディスカッションを行っている。渋渋の生徒が課題研究論文を作成するためのアンケート調査などにも、本校生徒が協力している。

渋渋がwwlコンソーシアムに申請する際、本校にもヒロシマプロジェクトの継続と同校が主催するシンポジウムへの参加打診があった。本校は連携校としてこれに加わり、今後も共同学習を継続していくこととしている。

③Peace Forum, 核兵器廃絶署名活動

課題研究を实践に移す上記署名活動にも、非常に多くの高校が協力してくれている。国内全体で協力校は48校に上る(うちSGH7校、SGHA2校)。この活動を通じて、8月に本校が主催している国際会議Peace ForumにSGH2校が来校し、核軍縮・平和構築について研究成果発表を行い、研究を实践に移すためのディスカッションを実施している。

(6) 課題や問題点について

全般的にグローバル人材育成のためのカリキュラム開発には成功したと考えられるが、課題としては4つ挙げられる。

(a)海外進学者数

アウトプット・アウトカムのうち、最も数値が伸びなかったのはこの項目であった。

指標（アウトカム）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度実績	平成30年度目標
海外の大学に進学する生徒数（人）	1	2	3	2	0	1	6

海外進学を希望していながら最終的に国内の大学を選んだ生徒に、個別インタビューを数件実施した結果、数値が伸びなかった背景としては、①経済的負担の大きさ、②海外進学に対する保護者の理解の乏しさがあった。

対策として、例年の海外大学進学説明会をより充実させ、海外の大学と新たな推薦協定で合意した。海外大学進学説明会では、株式会社 ISA 海外進学担当者より進学に必要な準備や留学の意義について詳細に説明していただき、例年より多い米加豪など8つの大学より大学紹介をしていただいた。本校では従来オハイオ州のマウントユニオン大学とアイルランドのトリニティ・カレッジに推薦枠を持っているが、新たにカリフォルニア州のセントメアリーズ大学からも5名の推薦協定を作ることができ、海外進学のチャンスが大きく広がった。さらに、学費の負担が欧米より小さい台湾・マレーシアの大学進学説明会も新たに実施するとともに、海外進学の際に利用できる各種奨学金の案内も行った。

その結果、現高2には海外進学希望者が増加し、最終目標と同じ6名の生徒が海外進学を希望している。また、海外大学進学説明会は地域にもオープンにしており、他校の生徒・保護者からも参加があった。**本校が広島市の高校生全体の海外大学進学を支援している**と言える。

(b)課題研究スキルの向上

生徒が課題研究を深めるためのアカデミックなスキルは、まだ十分身につけているとは言えない。総合的な学習1単位の中で実施してきた課題研究は、研究内容を深めることに重点を置いて実施してきた。リサーチ、論文・プレゼンテーション作成、ディスカッション、資料読解などの演習である。一方で、課題研究の方法的スキルを教授する時間は限られていた。そのため、生徒によって研究成果の差が生じていた点も少なくない。運営指導委員の評価からも、もっと言語運用能力、すなわち読解力・記述力などを体系的に身に付けさせる工夫が必要であるという指摘を受けた。

そこで、次年度より単位数を2単位に増やし、課題研究の質を上げるための研究メソッドを教授する時間を設ける(後述)。

(c)学校独自の評価基準の策定

生徒の成果物やパフォーマンスについて、点数刻みではない基準で評価することはまだ学校全体に浸透していない。SGH 指定以来、課題研究を従来の教科学習のように定量的・総括的にのみ評価するのではなく、定性的・形成的に評価すべく試行錯誤を続けてきた。先述したGIの授業の中で生徒の成果物やパフォーマンスを評価するルーブリックを作成し、運営指導委員から講評していただくなどである。しかし、学校として全体にそれを根付かせるには至らず、一部での試験的な利用にとどまっていた。これを学校全体の教育活動に広げるべく、本校として新たに独自の3つのポリシーとキーコンピテンシーを定め、これを軸に教育活動の評価基準を統合しようとしている(後述)。

(d)さらなる高大接続の開発

国内外の大学から教授・学生が来校する回数は飛躍的に増大した。しかし、その多くは「連携」であり、「接続」までできている事例は少ない。回数が増加した大学との「連携」は、必要に応じて、短期的に、大学のリソースを高校に一方的に提供するというものがほとんどである。本来あるべき「接続」とは、教育のビジョンや方法論を高大で共創し、恒常的に、大学と高校がリソースを提供し合うものである。後者まで至ったのは、

先述した東京大学(首都大学東京)・広島市立大学・広島大学の3例にとどまっている。

「接続」をより充実させるために、関西学院高等部の wwl コンソーシアム事業における連携校として参画しすることとした。

(7) 今後の持続可能性について

SGH 指定 5 年間の変革を通じて、本校は変化が持続可能な学校になっている。成果をより高め、浮かび上がった課題を克服するため、指定明けのカリキュラムデザインを描く部署「教育構想検討委員会」を 2016 年度から設置し、議論を続けてきた。これは、**SGH 指定満了後もグローバル教育をより高い次元で継続しようという本校の意思を、組織づくりの点から担保する**ものである。2018 年度からは、2019 年度より実施する新たな課題研究を具体的に練り上げるため、「課題研究検討委員会」を設置した。以下、両委員会で検討してきた指定明けの構想について、(6) で挙げた課題の克服という点に焦点を当てて説明する。

(a) 3つのポリシーとキーコンピテンシー、およびルーブリックの策定

生徒の成果物・パフォーマンスをより定性的・形成的な軸で評価するため、本校独自にアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー、キーコンピテンシーを作成した。3つのポリシーとコンピテンシーの原則は、「自己肯定感・自己効力感を向上させるために、主体性・人間理解・グローバルマインドを育てること」である。さらに、今後生徒の成果物・パフォーマンスを定性的・形成的に評価するルーブリックの作成にあたっては、教育構想検討委員会が作成した原案を、全教科・全校務分掌で検討して再修正するとともに、運営指導委員の濱名篤・関西国際大学学長に監修していただいた。

今後、これらのポリシーとコンピテンシーを、各学年・各教科・各委員会・学校行事などすべての教育活動に適用し、統一したルーブリック評価を行う準備を進めている。指定明けも、SGH 研究開発名にも掲げた「**成長目標の共有を通じた生徒・教員協働によるグローバル人材育成**」を目指した教育活動を行うことができると確信している。

<研究開発実施報告書 添付資料「広島女学院 3 ポリシー、キーコンピテンシー」「キーコンピテンシールーブリック」を参照>

(b) 海外研修の位置づけと課題研究のカリキュラム改編

SGH 委託費による補助がなくなる中で、成果の大きい海外研修を持続させるために、**修学旅行の改編**を視野に入れる。具体的には、各学年にまたがっていた希望者選抜型の海外研修と全員が参加する国内研修を統合的に発展させ、国内外の研修を同時期に実施し、希望する研修を選択できる分散派遣のかたちをめざす。

これまで、海外研修は希望者の選抜であり、参加を希望しながらできない生徒もいた。委託費を受け取る関係上、希望者全員に参加を認めることができなかつたためである。また、本校は生徒全体を SGH 対象としているため、学年共通の課題研究テーマを設定した。これは、生徒が自分の学びたい領域と課題研究テーマが適合しない状況も生んだ。

指定明け以降は、海外研修費用を全額自己負担とし、希望する生徒が希望する国内外研修に参加できるようにする。同時に、課題研究も学年共通のものから、生徒が希望する学問領域を選択できるようにする。そして、**課題研究テーマと研修先を連動させ、自分の学びことを深められる研修を選択可能なカリキュラムへの改編をめざす**。このような分散派遣にすることで、より生徒の個々の関心に最適な研修にすることができる。

(c) 課題研究の加速

課題研究のスキルを高めるために、従来総合的な学習 1 単位で実施してきたカリキュラムを 2 単位に増設する。先述したように、1 単位では内容を深める成果物作成にカリ

キュラムの大半を割いていた。**成果物と探求過程におけるパフォーマンスの質を高めるため、単位数を2単位に増やし**、各学年に順次『課題研究メソッド』（啓林館）などを共通の研究テキストとして導入する。この教材でリサーチ、プレゼンテーション、ディベート、論文作成法などを身につける。学習したスキルの実践として、平和構築研究はもちろん、理科・社会の授業とも連動させる。例えば、総合的な学習の時間に先述のテキストで資料の探し方・引用の仕方を学んだことを踏まえ、理科・社会では図書館やインターネットを使って自分のテーマにあった資料を実際探し、適切な方法で引用するというものである。このように、5年間で培った課題研究成果とその課題を、総合的な学習の時間の増設と通常授業への波及によって演繹し、克服する。

(d)質的な高大接続へ

Extensive Program(以下 EP)を新設し、従来の学びの枠を超えて教師・生徒が学び合う時間をつくる。EPのねらいは、質的な高大接続にある。

EPとは、教科・学年の枠組みを超えて、生徒が自らの興味・関心に沿って学び合うという、大学のあり方を先取りするプログラムである。学期ごとに50～100分×5回程度の講座を教員が自由に設定し、中3から高3までの生徒が自由に選択する。1講座約20名程度とし、少人数で濃密なアクティブ・ラーニングが行えるようにする。教師が問題と答えを生徒に与えるのではなく、生徒が自分で学びたいこと、探求したいことの間を立て、**教師・生徒同士が協働**して自分なりの解をつくっていくのがEPである。このような学びは、高等教育におけるゼミのかたちには他ならない。高大接続は、大学の教員が高校に来ていればいいというものではない。高校における学びのあり方を、大学における学びに質的に近づけていくことが重要であり、次年度からそれに挑戦する。

EP 一部抜粋(全33講座)

担当部署	講座名	内容
理科	こうして世界に核兵器がもたらされた	$E=mc^2$ や核分裂、放射線の意味、核兵器の仕組みと、マンハッタン計画などの初期の核開発について
理科	リケジョを目指して ～自由研究を楽しもう～	自由研究のテーマさがしや、テーマに対する科学的なアプローチの仕方など、本格的に夏休みの自由研究を進められるように理科の教員と一緒に準備します。
英語科	Studying Art in English	英語で世界の芸術を鑑賞し、表現することを目的とします。芸術鑑賞のための英語表現を学び、意見交換や協働分析作業などを通して芸術を見る目も養います。
国語科	短編小説を掘り下げてみよう	短編小説を読んで感想や意見を交換した後、作品のお勧め文章200字を参加者全員で協力して制作する。
英語科	Peace Park Guide in English	平和公園の碑めぐり案内を英語でやろう！文献読解、原稿作成、英語でのコミュニケーション、ガイド方法など、ほぼ4技能を駆使します。
社会科	自由研究～人文・社会科学分野	「もっと調べたい」を極めていきます！海外・国内研修で得たことや、女学院の授業・活動で関心が高まったことなどについてさらに深く調査し、まとめます。

このように、**SGH 指定明けの教育ビジョンが具体的に構想されている**。それが一部の教員ではなく、学校組織として行われていることで、**持続可能性が担保されている**。今後、指定期間以上に成果の向上をめざし、それを本校はもちろん地域社会に還元していく。